

---

# 戦場の管理者

廣瀬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

戦場の管理者

### 【Nコード】

N4530W

### 【作者名】

廣瀬

### 【あらすじ】

突然軍隊に攻められた街。銃声と殺戮の場となった街に住む少女が知った、あまりにも恵まれすぎた街の秘密。たった一人真実を知る少年が、その秘密を暴露したとき、生存者は決断を下す。

地下一階や二階とは比較にならない、広い空間に来てとても驚いた。いま自分たちのいるのが山中だなんてとても信じられない。電氣をつけたとたん光り輝いて私たちを出迎えたのはドーム型の天井にはめこまれた巨大クリスタルのシャンデリアで、リノリウムの床にステンレス製のパネルで覆われた壁、白いベンチ、いずれも一本しかない架線の設備としてはじゅうぶんすぎた。目隠しをされてつれてこられたなら、どこか大都会の地下鉄の構内といわれても納得しただろう。

おそらく一度か、多くても二度以上は使われない目的のための山中駅　それが豪華で凝っていていればいるほど、私たちが報いをうけたのだということを思い知った。その報いが過大であつたか過小であつたか、私たちの感じたところはさておき、専用の列車に乗る権利のあるものはことごとく、口をそろえて私たちが悪いのだというだろう。

「交代で、あかりを持って進もう。つかれたら休憩する。たぶん数十キロだと思うけどどれくらいかかるかわからないから、線路の上を歩くより端のほうがいい、平らで足も痛くならないから」

互いに協力して車両のない線路に降り立つと、全員が、進む方向を見つめてほぼ同時にため息をついた。暗いトンネルの先は闇より深い無だったが、それでももはや行く以外にてだてはない。

今後、私たちが裁かれるのだとすればどうやってなのか、あの殺戮以上の方法でか　しかし、固定概念とか正義とか法律とかともにおそれる気持ちも麻痺していて、すでに放蕩以上のおそれるべき罪を犯したというのに、なにかはれればれとしているようでもあつた。

小さな手を握り返して、歩き始める。

そのうちに、ぼつりぼつりと誰からともなく事情を話し始めた。人魂のようにかぼそいともしびが導く闇夜行路に、吐息と靴音だけのみちづれではさびしくて仕方なかったのだ。

中年女性と青年、そして小学生が語り終え、町中でもっとも罪が深いであろう萱森が話し始めたとき、とくに注意深く、四人は一言も聞き漏らさないように耳をそばだてた。声変わりをすませて久しい彼と私はずっと同じクラスで過ごしてきたはずで、事情もよく知っているのに、はじめて聞く声のように思えた。

彼の拳銃は、もともとおじいさんが留学していたとき手に入れたもので、金庫にずっと大事にしまっていたそうだ。これまで折に触れて取り出してはよからぬことも考えたのだが、いちばんいい時に使えてよかったとぼつりと呟いた。たったひとり事情を知りながら口をつぐんでいなければならなかったつらさや申し訳なさは、いったいどれほどのものだろう。引き金をひいたときの形相から、全員が彼の苦しみを知って、この期におよんでもう責めることはしない、とそのとき決めた。

すべてを語り終えた、ランタンをもつ背中から清潔な水のおいがする。

全員でボタンを押したあと、倦怠と虚脱が支配した部屋で誰かがした建設的な提案は、入浴と食事をとることだった。浴室をひっくり返して調べたところ、管理人のもの以外にもさまざまなサイズの新品の服や下着、なぜか女物の着替えも一式そろっていて、持ち主はもう生きていないのだからという年長者のすすめにしたがって、私は、着ていたものをすべてとりかえることにした。しみついた汚れや体液を洗いおとして手当てもすませ、はじめて食べるインスタントラーメンで腹ごしらえをしたときには、あまりにも幸福すぎた。めまいさえ感じたほどだ。

線路はまっすぐ続いている。国民の血の税金を湯水のごとく使っていたれりつくせりの生活が、私たちを囲い込むための檻だったの

だということが、今でははっきりとわかった。

私の番だ。

背中にしょったリュックには、ありったけの食料と着替えと、脱いだ制服がいちばん下にある。夏用の薄いシャツとスカートおよび紺色のネクタイを、萱森は雑巾以下と断じて迷わずダストシユートに放ったけれど、私はもう着られないとわかつているのに捨てられなくて持つてきてしまった。

いまやみんなと同じで家族を失い、容姿にも頭にも恵まれていない、ただの十七歳だった私の話は……

海と山にはさまれた小さな町の、たったひとつの高校に通う身にしては珍しく、どこかほかの大きな街に住みたいとかいう気持ちはまるでなかった。それは、海辺でソフトクリームをほおばっているとき特にしみじみと思う。

かんかんでりの太陽がつくるソテツの木陰で素足をのばし、スカートのひざに課題図書、だけど読む気はぜんぜんなくて、もっぱら自転車のハンドルにぶらさげたラジカセから流れるポップスを聴いている。目の前は、夏休みの小学生たちでにぎわっていた。ごみや漂流物のない白い砂の浜はしつとりと輝いて清潔だ。町の住人しかこないからとてもよくて、テレビで見る南国の海にもひけをとらない水の透明さは、思わず飛び込んでみたくなる。

まあ、私はしない。女子高生だから。日焼けもきになるし。

制服姿でなければ満点のシチュエーションで、約束の時間が来るまでそうしていた。

「遅いようまあちゃん」

町のはずれにどかんと建っている広いショッピングモールは、雑

誌に載っているブランドの服からガムテープといった日用品まで何でもそろつ。立派なレストラン街もあつて、外食というともっぱらここに来ることになる。買い物のおついでに入れる安価なフードコートも併設され、学生には、見た目のいいファーストフードを扱うジューススタンドが人気だ。

広いエントランスを抜けてフードコートを見渡すと、案の定、スタンド前のテーブルにいた先輩がこちらにむかつて手を振つた。艶のある茶髪の上に、天井から光が差し込んでいる。近くにある噴水に反射して、ただでさえ美人なのにかさねがさね美人だ。

先輩は、制服姿の私をねぎらつたあと、メニューを指差した。

「なんか飲む？　ねえ、さっき海岸にいたでしょう。車から見えたんだ」

「ということは送つてもらつたんですね。この暑い中、私なんか自転車こいで来たのに」

「いやん、だつて暑いんだもん」

休み明けの体育祭で踊るダンスの曲はもう決めてある。あとは振り付けだけだ。ジュースを飲み終わると、先輩は立ち上がり、制服の上だけ派手なシャツ姿で踊り始めた。

「こうきてこうきて、こうね。今、紙に動きを書いてただけど、曲のテンポとどうかなって」

私は、持ってきたラジカセから音楽を流した。まわりに誰もいないので、スタンド前の円形広場はステージさながら踊りの練習場所になる。ひととおり教わつて一緒に踊り終わると、スタンドにいた店員が拍手をくれた。

私は知っている。この店員が先輩の恋人だということを。高校の、たしか三つ上の先輩で、通信教育で大学の講義を受けながら働いているのだ。勤労青年は口笛まで吹き、先輩に向かって満面の笑みで手をふつた。

「細かいフリはどうですかねえ。中学生もいるし……半年前まで小学生だったんですよ。そろいます？」

「そろえないと話にならんわね。ただでさえ少ないのに」

最後の体育祭だから、先輩ははりきっている。彼女は卒業したら都会に行くのだ。つまりもうもどってこないということ。試験に合格した人だけが町の外へ出てゆけるから、その学力は単純にうらやましかったが、なんでこんなに住みよい場所をみずから捨ててゆくのか理解に苦しむ。

帰り道、自転車を押しながらというと、先輩は笑って否定した。「捨てるとかじゃないのよ。ここは何でもそろいすぎて、そりやとても便利だと思う。けど、卒業したらみんな同じように同じ場所で働いて、ずっと同じ場所に住み続けて、っていうのは別の生きかたに興味があっただけ」

山から海へと太陽のバトンが渡され、次のランナーである月が夜を走りだす。この世のすべての美を並べてもたりない、永遠が疾走する風景。ここよりみちたりた場所はない。都会の喧騒、ビル群、おおぜいのひとびと、そういうものに憧れる先輩の心は心として漠然と理解したが、自分はけしてそれを選ばないかと再び思った。

街灯とともに、黒い山陰にも明かりが点る。大昔からある施設の光だ。炭鉱時代の坑道が残っていて、国によって試験的に残された元鉱山。小さな施設を、今でも誰かしらが管理している。小学校の遠足でみんな行く。あれを見ると、私はいよいよ夜だと思って気があせる。宵闇に追われるように足を速めた。

ぶきみなくらい静かだった。山道はなだらかなカーブをえがいて、このまま永遠に続くようだ。シャツやスカートはおろか、その下に身につけた下着にいたるまで、粘膜を刺激する油っぽいような汚れた水を吸ってひどく体が重かった。全身からだよう悪臭に、さっきいちど吐いたのにまた吐きそうになる。道の途中には、だいたいの目安となるキャンプ場へ行く細い通路、遊歩道のようなものがある。

るはずだが、まだ見えない。

一瞬、悲鳴のようなものがきこえてびくりと背後を見た。登ってきた山道が暗い緑に飲み込まれているように思えた。体力の限界はとつくにこえていて、もう涙も出ない。

大きく息を吸い込んで、再びゆつくりと歩き始めた。何も考えないようにしようと思ったが最後、同級生たちはどうしたんだろうかと心配になる。ゆりかにあいな、みちる、えりか、りんちゃん。大野に戸高に三沢、萱森、鈴木。みんな、あの炎の中にいるのだろうか。そして家族も、と考えたとき、やはり空耳でない泣き声に気づいて私は立ち止まる。背後からではなく、まがりくねったカーブの見えない先から。どうやら子どもものだとわかると、急ぐ理由ができてこんな状況なのにむしろ嬉しかった。すくなくとも、これでひとりで死ぬことはないから。

新学期がはじまると、学校は体育祭一色で、小さな町も、さながらお祭りを迎えるように浮き足だつ。町にただひとつの中学校と高校は、敷地を同じくしている関係上あたりまえのように運動場も共同で、学生数が足りないからついでに体育祭もいっしょとなると、すくない人数が裏目にでてさらに忙しい。当日に教師が注文する弁当屋のごようききや、モールの中にあるスーパールの店員が必要なものを届けにきたりで、この時期の校門はつねに空きっぱなし、用務員のおじさんもちいちお客に身分をたずねることをやめてしまい、警備員室で白河夜船のボートに乗る。

先輩はたった十二人しかいない最上級生のひとりとして采配を振るっていた。体育祭まであと一週間とせまったその日、校舎に運び込まれるテントの資材をかついでいたのは、卒業生として手伝いに来た先輩の恋人で、まだ練習中だというのに人目もはばからずにいちゃいちゃしはじめたので、同級生の男子がいやな顔をした。



「どうせ遠距離になったら別れるんだろ。いいよな、外に行くひとは」

卒業したら先輩が大都市へ進学するということは誰でも知っている。外見も頭も性格もいいうえ、ものわりのいい年上の恋人までというねたみは男女問わずあつて、特に、勉強ができないグループからは、よくその声が聞かれた。幼稚園から高校まではどうしたつてみんな一緒、幼馴染同士のばかばかしいような文句ではあったが、昔からお互いよく知っているから先輩でも遠慮がない。菅森というそいつは、入場門に巻くビニールテープを抱えて、わざとらしく、カップルのすぐ脇を通つていった。

九月だというのに暑い。担任の差し入れのスポーツドリンクを紙コップで一気飲みする。

中学生の女子たちは、校舎の陰で手拍子にあわせてダンスの練習をしていた。私を見つけると、何人かが困った顔で寄ってくる。まだ大人になりきっていないあどけない表情で、全身汗だくだ。

「まあや先輩、三回半ですか、四回ですか」

「もういやだ、できない、間に合わない、わかんない」

「三回半だよ。大丈夫だから、ゆっくりやってみて」

彼女たちが、私のことを先輩の腰ぎんちゃくだと思っているのは知っていたが、年上として一応尊敬してくれるようだ。それにどうも、気軽に呼び出せるクレームの窓口とみなしている。なぜ振り付けた本人が来ないのかという不満が、彼女たちの無言にうかがえて、困つて先輩のほうを見ると、ようやく美人はこちらを振り向く。勤労青年が、軽トラックのほうへ去つていくところだった。「ごめんね」と陽気に走ってくる彼女の向こうに、白い入道雲がそびえたつて、ぶわ、と湿度の高い風が砂煙を巻き起こした。

「あ、痛」

コンタクトはこれだから。私は目をこすらないようにしながらまぶたを押さえ「ちよつと」と手を振って、その場を投げて水のみ場に向かった。めんどろくさがりの私は、体育祭があまり得意でなく、

しょっちゅうコンタクトを理由にさぼったりするのだが、今回はほんとうだった。激痛をこらえながら、昇降口の横の水場に急ぐ。

破裂するような先輩の手拍子と、幼い踊り子たちがぎゃあきゃあ言いながらステップを踏むさまは、カビのにおいがする洗い場でもわかった。恋人たちの逢瀬を邪魔した萱森が、今度は男子の騎馬戦で使う鉢巻のダンボールを抱えて「かわうそ、水浴び」といいながらグラウンドへと通り過ぎていく。続いて聞こえてきた、くくっという笑い声に振り向くと、一クラスしかない、同じく同級生の三沢が、別のダンボールを持って親友のあとを追っていくところだった。何か動物の顔まねをしている。たぶん私のあだなである川獺の真似なのだろうがちっとも似ていない。あほか、といおうとしたが、彼の表現したとおり、目と一緒に顔中も水びたしにしていたのでやめた。

「雨だ」

グラウンドにもどると雨が降り始めた。担任が出てきて解散を告げる。風邪をひくなよといわれながら、私たちは学校を追い出された。あわてて着替えたせいではなかった靴下を路上で履き、明日ははれるといいねと笑いあいながら先輩と一緒に帰った。体育祭まであと一週間にせまっていた。

毛布にくるまった私の上から優しい声が降ってくる。けして頭がいいといえない私でも理解できる言葉だった。

「ここにたどりついたのは四名だけです。あとはみんな海岸へそちらは全滅です。ええ、火を見ると水のある場所へ行きたくなるものなのでしょう。次のフィールドで応用できるかもしれません。ええ、保護しておきます」

生存者たちに差し出されたカップは、有名なコーヒーチェーン店が、毎年桜の季節にフェアで売り出しているものだった。おおげさ

な音をたてるスーパーの袋から、相手はクッキーを出して全員に配った。こげた髪を落ち着きなくなでつけていた中年のおばさんが袋を受け取って泣き出す。つられそうになったけれど、ぐっと我慢して、となりで力なくうなだれる小学生らしき男の子の頭をなでた。山道で一緒になったのだが、そのときから私よりずっと心細い様子で心配だった。彼は顔をあげ目を大きくみはった。どこかで見たことがある子だと思った。

「あと三時間で日没だな。君たちのほかにも、あとから来る人がいるかもしれない」

暗く静かな部屋に、すすり泣く声と機械類のたてる低いモーター音が響く。背の高い棚にびつちりと貼り付けられた薄いモニターに、さまがわりした町のおちこちの映像が流れている。こんなにもたくさんのカメラに、私たちは見られていたのだと呆然とした。まったく気づかなかった。

「お茶のおかわりがほしかったらいつてくれ」

モニターが放つぎらぎらしい光をまとった人物は、おちついた様子でアームチェアに腰かけ、気楽そうにしていた。

男の子が握りしめていたものがふと目にはいる。ブランド物の紙袋のきれはしだ。底が破れているので中身は道すがら落としてしまったのだろう、からっぽだった。子どもに不釣り合いな高級ブランドのロゴマークに、私はついこのあいだ家族と交わした会話を思い出した。

高校にもなつて親が体育祭にお弁当をもってやってきて、親戚までそこに加わるというのは恥ずかしい。しかし、昔からの恒例だ。はりきっているママが電話口で「じゃあ太巻きとおいなりはお母さんお願いね。うちはハンバーグとから揚げと、子どもの好きそうなのを持っていくわ」と早口で言う。パパが「ビールはひとケースで

いいか聞いてくれ」とソファから大声をあげた。

小学生の弟が、いいなあを連発して私にまわりつく。娘に甘いパパが、体育祭の百メートル走で三位以内に入ったら、新しい通学用バッグを買ってくれると約束したので、さつきから機嫌が悪いのだ。

「僕だつてあたらしいゲームほしい。僕のかばんだつて幼稚園のときから使ってるやつだもん、ずるい、まあやばっかり、ずるいずるいずるい」

「えいたは誕生日にちゃんとゲームもらつたでしょ。まだクリアしてないのにそんなこといわないよ」

「もう最後のラスボスだもん、明日終わっちゃうもん」

すねて、ママのスカートにまわりつく。僕もいいでしょお願い、という懇願を、ようやく受話器を置いたママは制止するかと思つたら、逆にパパに向かつて「私も新しいバッグほしいわ」と言い出した。

「ブランドの秋モデルがね、どうしても……。このあいだお店にいったら、店員さんが、奥さまは絶対これ買われると思いますよって入荷したら、私のぶんをとり置いてくれるっていうのよ」

モールの高級ブティックに新モデルを見に行くのを、ママは毎月楽しみにしている。もう何十個もあるバッグやポーチ、ハンカチは順々に私のものになる。期待をこめてパパを見ると、パパは「しようがないな」とうなずいた。

「わかつたから。えいたも、ほしいものがあるならちゃんとママにお願いしなさい。ただし、二人は来月の給付金が出るまで待つんだよ。まあやと先に約束していたんだからね」

「はい」

私たちのほしいものは、頼めば最終的になんでも買ってもらえた。国指定過疎地域であるこの町は、政府から手厚い補償がされている。都会とかわりない生活と所得を保てるよう、給付金をはじめ、あらゆる補助、福利厚生が整っていた。パパのお給料も、何割かは

国が会社にかわって出しているのだ。今住んでいる家だって国が建ててくれた。

この町に住むかぎり、日々の暮らしに困ることはまずない。

地下に核廃棄物でも埋まってるんじゃないかという冗談はよくあった。あまりにもめぐまれすぎているから。

室内プールやサウナ施設、スキー場など、町のにんげんだけでは貸切のように使える。いついつても、人が少なくひろびろしていて、やってくるひとたちの身なりもきれいだ。

「僕、今度はV のかばんがいい」

小学生でさえ、あたりまえに高級品を持っている。財政難にあえぐほかの町のことなど、みんな、ばかにして見ていた。貧乏とは無縁の生活は、ただただ贅沢と幸福しかない。なぜほかの町が苦勞しているのかなど、考えたことは一度もなかった。

私たちの知らなかった審判の日である今日は、体育祭まであと二日に迫っていた。数日続いた天候不順でグラウンドの設営は遅れに遅れ、その日の午後をすべて準備にあてることになった。私は実況や連絡のための放送機材を、グラウンドに近い一階、廊下のはしに運ぶ当番にされ、校舎とグラウンドを何度も往復した。開会式や閉会式で使うマイクスタンドは、隣接する中学校の校舎から借りなければ足りない。普段目にしない機械たちはどれも重く、三十分もすると、暑さといまっつとどつと疲れた。ひと段落したところで後輩たちに任せて、ちょっと日陰で休憩、と、高校校舎のコンクリート製の外階段の一段目にこしかけた。

したたりおちる汗をハンカチでぬぐっていると、そよ風が首筋を吹き抜けていった。気持ちよさに、しばらく目を閉じて呼吸をゆつくりとする。制服のスカートのすそを少し持ち上げ、熱くなった足を冷ます。靴下もスニーカーも、いっそ脱いでしまいたかった。早

朝から目がくらむようなまぶしい光を浴び続けて、ちょっとぼうつとする。遠い山の空は青く澄みきって、その日、町のにんげんは久しぶりにまるい太陽の姿を見た。

もしも雨だったなら、私たちの運命はまた別の方向に進んでいたのかもしれない。だけど、そんなことをもちろん私たちは知ることもなく、ただ、体育祭のことで頭がいっぱいだった。

遠くから、生徒たちの声がする。なんだかいい感じにノスタルジックで不思議に懐かしく、やすらかな空気に包まれてもうこのまま寝ちゃいたいと思った。そのときだ。

突然、サイレンが鳴り始めた。火事するときになるやつだ。この時期にめずらしい、どこが燃えているんだろうと遠くにいる同級生の声に耳をすませる。「なんだろうな」と口々に怒鳴りあっているさまからして、近場で火事が起こったのではないだろう。

ちよつと不思議に思ったのは、火事で鳴る市のサイレンは、十秒ほどで音量をがくと落として、デクレッシェンドして消えるのだが、今日はやけに長いということだ。いつまでもいつまでも終わらない。一分をこえるとさすがに妙で、こっそりさぼっているばつの悪さもあつてしぶしぶ立ち上がった。グラウンドで作業をしていた同級生も先輩も後輩も、顔を見合わせていた。

「なあに、これ。長すぎるよね」

「火事じゃないのか」

「故障かなにか？」

会話に加わろうと、日陰から一歩踏み出しかけたとき、なにかが視界を横切った。いや、横切ってはいない。なにかが、上から下へものすごい速さで落ちてきた。くうをきるような音と破裂音は同時に聞こえたと思う。視界が真っ赤に染まって、私は階段と校舎の陰に吹き飛ばされた。ざらついた壁面にむきだしの腕をこすって、ああ怪我をしたなとわかったが、自分の傷よりも、何が起こったのか知ろうとする思いのほうが強かった。

石段に手について座りこんだ。グラウンドのほうを見る。

信じられないことが起こっていた。

グラウンドの真ん中辺りが、黒く焦げてえぐれている。爆発の直前、周囲にいたはずのみつかちゃんたちがいなくなつて、もしかしたら、黒煙のなかにうつすらと、赤と黒のかたまりにしか見えないそれがそうなのだろうか。頭の中はエクスクラメーションとクエスチョンだらけで、ようやくしぼりだした答えは、隕石？ だった。呆然としてみると、また、打ち上げ花火があがるときの音がした。今度は背中の中ので鳴った、どおんとすさまじい振動とともに、校舎の窓ガラスがいつせいに割れる音。

悲鳴があがった。おそろおそろ、階段の陰からはいでて、声のするほうを見た。半身に突き刺さったガラスに、半狂乱におちいった後輩たちがいた。

ぐおおおという機械的な轟音に、はつとして空を見上げる。何機もの飛行機の機影　きれいに編隊を作つて飛ぶそれらは、住宅街のうえで、何か小さな黒いものをばらばらと空中に放出している。しばらくすると、家々から真っ赤なものが吹き上がり、爆発音が何度も聞こえた。

校舎の中にいて助かつたらしい教師と生徒たちが、グラウンドに飛び出してきた。ケイホウダ、と教師の一人が叫んだ。ニゲロニゲロ。そう彼の口が動いた瞬間、上空を旋回してもどつてきた大きな飛行機が、グラウンドにむかつて何かを落とした。

人が空中を飛ぶのをはじめてみた　映画みたいだった。最初の爆発で助かつて、その場に座り込んでいた生徒たちの姿が一瞬で消えた。痛いよう、と叫んでいたガラスまみれの後輩たちも、あつけにとられたようすで立ち尽くしている。あまりに信じられないことが起こると、どんなに痛くても思考が止まってしまうのだろう。

私も動けなかった。

だが、ようやく、わけはわかった。

飛行機が、爆弾を落としている。この町に。私たちの学校に。のどの奥からひきつれたようなうめき声が出た。いまや頭の中は

疑問符もなく真っ白で、どうして、もなんで、も言葉にならなかった。ただ悲鳴のような声を私は上げた。そうしなければ許容範囲をこえていた。

上空を旋回する飛行機が、また黒いものをばらまいた。今度は、さつきよりも小さなコシヨウの粒みたいなものをたくさん。それらは、校舎とグラウンドにはじけとび、熱風と炎の渦をまきおこした。私はとつさに階段の陰に飛び込み、小さく身を縮めた。さらに悲鳴があがり、腕で顔をかばった視界のはしに、火だるまになったにんげんの姿がうつった。

逃げなくちゃ、と思った。安全な場所はどこだろう。学校は無理だ、もうぜつしたいに。はやく、どこからかここを出たい。中学校と共通の校門は遠すぎる。裏門も、とてもたどりつけっこない。ひらめいたのは、文化部の部室棟の裏手にあるフェンスだった。人がひとり通れるくらいの穴があいて、コンビ二への近道に生徒がつかうので、土手が階段になっている。ここからすぐだ。

校舎のうんと奥ならおそらく大丈夫、ということに思い至らなかったのは、まさにパニックに陥っていたからだろう。ぜつしたいに安全である場所として思い浮かんだのはやっぱり自分のうちで、とにかくまず帰りたいというこの判断が、私と、先輩をはじめとする学校のみんなとの運命をわけたことを私はまだ知らなかった。

とにかくあたりをうかがいながら階段わきのくぼみから這い出し、火の手の少ない渡り廊下のほうへ向かった。体育館に大きな穴がいくつもあいて、火がくすぶっているのが見えた。体育の先生が、そばで消火器を持ってうろうろしている。すぐ横を通り過ぎたのに気づけなかった。

炎による熱気がどこもかしこもあった。煙がしみて涙がぼろぼろ出た。ひどいにおいがきついし、聞こえてくる怒鳴り声や悲鳴が怖い。もつれそうになる足を必死で動かす。

たどりついた文化部の部室棟建物は、はしっこからめらめらと燃えていたが、スカートを持ち上げ、飛び越えるようにして駆け抜け



る。茂った草にはんぶん隠れているフェンスの穴をくぐって、私はなんとか学校から出た。近くには誰もいなかった。柔らかな地面からアスファルトの上に降り立つと、煙の量がちよつと減った。視界が晴れたので、涙と鼻水でべとべとの顔を袖でぬぐった。どこかかんすとすごい音　町じゅうぜんぶがフライパンの中でいためられているみたいだ。

小学校にいる弟が心配だった。連れて二人で帰りたいけれど、ここからどう行けばいいのだろうか。住宅街に入ると、燃え盛る家々から逃げ出すひとたちと一緒にになった。

「あの、小学校に行きたいんです。あつちは、火は」

「子どもたちなら、先生とさつきここを通ってとつくに逃げたよ。わたしたちもいこうまあちゃん、一緒に」

顔見知りのおばあさんが、私を見て言った。大きな旅行バッグを背負うようにして持っていた。

「大きな道はだめだ、小さい飛行機が、どんどん機関銃を使ってる、車はだめ」

道端に、にんげんの死体があった。もうむしろ夢みたいだ。すぐ後ろで、すさまじい振動と熱量をとまなつて、焼きつくされた家が倒壊する。おばあさんと一緒に、私は走り出した。おばあさんはずつと念仏をとんでいた。呼吸するたびにのどがぴりつとして苦しいのにやめなかった。そのうち、おばあさんは私のスピードに遅れ始めた。「先にいきな」というのに「わかった、気をつけて」と怒鳴る。角を曲がって浜辺への道にはいったとき、すぐ後ろで打ち上げ花火の音がした。

どおん、という振動とともに、私はなにか強いものに背中を押されて転んだ。ふいに足元がなくなった感覚のあと、体中に衝撃がはしり、ぶつりと視界がとぎれて真っ暗になった。

気がついたとき、私は水の中にいた。口の中に泥と血のおいがして、全身がぬれていた。体を起こしてあたりを見る。コンクリートの壁の上は空。水路に落ちたんだ、と思った。

直前になにをしていたかゆっくり思い出す。うしろに爆弾がおちて、その爆風かなにかで吹き飛ばされた？ よくわからないが、それ以外にここにいる理由がない。ぐしょぐしょのスニーカーの感触に辟易しながら、全身ずぶぬれでよろよろと立ち上がる。広い水路のあちこちで、いろんな残骸が目に入った。おばあさんの持っていたバッグが、半分、底の土にめりこむようにして転がっていた。無事だろうか。どのくらい水の中に寝ていたのかわからない、きつとほんの少しのあいだだろうと思うけど。ここにいる私に気づかなかったのなら、たぶんもう遠くにいつてしまったのだろう。

水路は生活排水を流すためのもので、生臭くて汚れている。頭痛に気づいて頭に手をやると、こぶができているのがわかった。全身がぎしぎし痛い。バッグを拾い上げる気力もなくコンクリートの壁を見上げる。私の背より高く、つるつるで登れそうにない。おまけにどこにむかつて走っていたのかもわからなくなった。前後にまっすぐ続く水路は、前も後ろも、暗い天井でそのうちおおわれてしまふ。

おちたのは私ひとりきり。ほかに頼れる人はいないし、ぐずぐずしてもいられない。おちるまえは海の方にむかっていたのだから、そちらに行きたいと思ったけれど、方角を知りようもない。なかばやけくそ気味に、私はそのまま向いていたほうに進むことにした。歩いていくうちに、なぜかしらまた涙が出てきた。

数分もすると、頭の上がコンクリートのふたでおおわれてまっくらになる。聞こえるのはものが燃えて崩れる音だけ、怖い、心細い、どうしたらいいのかわからない。ぐすぐす泣きながら、ただ、歩くのをやめるわけにはいかないということだけで、必死で足を動かした。

道がだんだん細く狭くなる。よつんばいですすまなければならぬ場所になると、天井が頭のすぐ上になり、ここならじゅうぶん出られると思ったけれど無理だった。途中でおおきくまがった水路は、町のメインストリートにあたる道路を横断しているらしく、頭上を

ものすごいいきおいで、重くて大きなものが通っていったからだ。一緒に、激しい怒鳴り声もした。生き残ってるやつを探せ、という命令口調に答える「はい」という言葉と、単発で何度も聞こえる銃声。これだけで、見つけだされたら最後だということを悟るのにじゅうぶんだった。

戦争、と漠然と思った。

進むべき方向を間違えたことに気づいたのは、はいつくばって十五分もたったところだ。ひきかえそうにも、後退する体力はもうないので、手探りで進み続けた。おばあさんのように、「死にたくないよう」「痛い、怖い」「ママ」という念仏と大差のない言葉が交互に出た。

やがて、水路は再び、太く広い幅をもつものにかわった。傷だらけのひざと手のひらをのばして立って歩く。流れる水がだんだん澄んできたころ、唐突にいきどまりにつきあたった。天井はコンクリートのふたから、鉄でできた格子のふたになり、排水溝の穴が三つ、それぞれの壁の真ん中についている。高さは、背伸びをすればじゅうぶんとどくくらいだ。底は泥が多く、水の流れはほとんどない。排水溝の穴に足をかければ登れそうだった。

だんだん、ここにずっといれば助かるのではないかと思い始めていたが、上から差し込む光への欲望に勝てなかった。死ぬなら明るいうところで死にたいと切に思った。それに、ここでは悲鳴がまったく聞こえないので、たぶんきつと大丈夫。爆音よりむしろ蝉の鳴き声が近いほどなのだ。足をふんばって、鉄のふたをゆっくり押し上げる。手をやけどしていることに、このときはじめて気づいたが、さらに力をふりしぼって、ふたをずらした。半分ほど隙間があらわなところで、へりに手をかけ、つまさきをかけてよじ登る。

数十分ぶりの外はまぶしかった。立ち上がると、あたりには建物はなく、目の前には緑が広がるばかりだった。炎の気配はない。ぐるりと周囲を見渡す。はるか向こうに、高校の校舎と、赤色に染まるショッピングモール、それから、パパの会社のビルと町役場の

展望タワー。地理はいちばん苦手だったが、目印になる建物を順に追ううちに、自分がどこにたどりついたのなんとなくわかった。水路はすこしずつ傾斜して、私は山のほうへと向かっていたのだ。鉱山施設に登る道のふもとだ。赤い喧騒がうそのように静まり返っていて、ようやくちゃんと呼吸ができた。

いまさら海のほうへは行けなかった。私は曲がりくねった道を、山へと歩き始めた。

そして、キャンプ場に入る道で、小学校に入るか入らないくらいの、小さな男の子と一緒にになった。

つい昨晚のことを思い出す。ママがつくった夜ごはんは、マッシュルームにたまねぎたっぷりのビーフシチュー、ふんわりとお皿に盛られた鮮やかなたんぽぽ色サフランライスとレタスサラダだった。ぜんぶ私の好きなメニューで、体重が気になるけど、パパといっしょにおかわりしようかどうか迷った。

ごはんのあとは、弟と一緒にゲームをした。最後のボスを倒しておおよろこびした。

まるで遠い夏の陽炎のように思い出されて、家族の笑顔は、いやな予感とともに私の頭を占拠した。

「ああ、これだけ残ってたか」

モニターのひとつがきりかわる。固定カメラではなく、誰かが撮っている映像のようだ。

戦闘機による爆撃はすでに終わって、町では戦車と兵隊による制圧がはじまっていた。彼らはてきぱきと行動し、建物の中に隠れていた住人をかたっぱしから引きずり出していた。あるものはさんざん抵抗して、あるものはおとなしくしたがった末に銃弾をうちこまれたり剣でつかれたりして殺されていた。顔見知りの町役場のお兄さんが刺されてから、もうモニターを見る気もなくうなだれていた

私は、男のひとりごとめいた呟きに、ふと数十分ぶりに画面を見上げ、カップに口をつけたまま釘付けになった。揺れ動く画面は、高校のグラウンドだ。戦車が何台も連なり、迷彩服に銃を持った男のひとたちがたくさんいる。彼らと少しはなれたところには、小さい子どもや老人たちが集められていた。よりそうように一箇所にかたまつて座り込んでいる彼らの表情は暗い。取り囲むように立った五人の兵隊が、みんなに銃を向けているからだ。

隣の男の子が、びくつと震えて、私の腕をつかんだ。彼は、映像を食い入るように見つめはじめる。ちいちゃんがかみいちゃんだか、女の子の名前を呼んだ。私はモニターに視線をもどす。画面の中では、銃を持った兵士たちが笑顔で話していたが、ふいにアップになっていた。ひとりの小さな女の子が、老人の肩にしがみついて泣いている。

「ちいちゃん？」

「ちいちゃん　ともだち」

男の子はそれだけ言つて黙つた。幼稚園の名札をつけているちいちゃんは、不安そうにカメラのレンズを見ている。と、ふたたび映像は兵士たちにもどり、五人の兵士のもとに、ほかの兵隊たちが、かわつた銃を持って集まつてきた。もち手の部分が分厚く、下部分にタンクのようなものが装てんされている。先のほうは、ほかの兵士がもっているのとくらべて円筒形がずいぶん太く、ふうがわりな大きなレバーのようなものがついていた。

一人の兵士の合図で、みんなにそのかわつた銃が向けられる。次の瞬間、レバーがひかれ、銃口から、いつせいに炎がふきだした。銃ではなく、火炎放射器だったのだ。あつというまにみんな火に飲み込まれる。泣き叫び逃げようとする彼らに、容赦なく炎が浴びせられ、呆然とする私たちの前で、町のひとたちは黒焦げになつて死んでいった。もちろん、小さなちいちゃんも。

男の子が泣きはじめた。しがみついてくる背中をなでてやることしかできない。そして私は、あんなふうになが死ぬ場面を見るのは

ショックだったけど、いたのが老人とごく幼い子どもだけだったことを疑問に思っていた。

「お、まだいたか」

画面がまたきりかわる。映し出された光景に、私ともうひとり、おばさんの横にいた生存者が息を飲むのがわかった。顔を見合わせていると、目の前の男が笑って「そういえば、君たち仲がよかったねえ」と呟いた。

先輩。私たちのマドンナが、二人の兵士に、昇降口から引きずり出される場所だった。もともと校舎の中にいて、ずっと隠れていたようだ。校庭でサッカーをしていた兵士たちも気づき、ボールを蹴りながらやってきた。大勢にとりかこまれて、先輩は何か大声で叫んでいる。彼女にむかってボールが蹴られた。それが血と砂まみれになったにんげんの頭部だということに、私はやっと気づいた。先輩のきれいな顔が驚愕と恐怖にゆがむ。先輩、と呟いても届かないことがわかっていても、呼ばずにはいらなかった。男が笑う。

救いのないことはさつきわかっていたはずなのに、まだそれは終わらなかったのだ

生首をつきつけられて逃げるすべもなく座り込む先輩の胸を、ふいに兵士のひとりが力いっぱい蹴った。後ろに倒れこんだ先輩に、ほかの兵士たちが馬乗りになる。スカートがめくれて、細い足がばたばたと空気をかいた。そこで画面はぶれ、地面がいっぱいに映し出された。カメラマンが撮影を放棄したのだ。やがて、ぶつりと映像自体が切れた。

「まあこのくらいは役得だろうな。この町にはもったいないくらいの美人だね。うらやましいことだ」

男は、くると椅子ごと回転して、私たちを見た。

「さて、もう説明したほうがいいかな。どうしてこの町がこんなふうになっているのか」

理不尽な襲撃、無抵抗の住民に対する不当な弾圧。それらがなぜ

行われたのか、もっとも知りたいことだった。恋人の名前を呼んでいた勤労青年も、顔をあげて男を見つめていた。自分たちだけだった怪我もなくここにいる罪悪感に狂いだしそうな四人にむかつて男が「それでは」と口を開いた。

しかし、男が説明する前に、低い電子音が鳴り響いた。施設に人が来たことを告げるものだ。男は「ああ、君たちの仲間かな」と立ち上がる。ややたつて、男と一緒に入ってきた人物を見てとても驚いた。それは、よく知った幼馴染で同級生だった。

「かわうそ、生きてたか」

私にむかつてそういった相手の名前を呼ぼうとして声がつまった。萱森は、学生服のシャツもズボンも、どろどろの汚物にまみれて、足元ははだしだった。彼は四人を順番に見て、厳しい表情をする。

「これだけ」と彼はうめいた。

「三千人もいて、これだけしかここに来なかったのか」

「そうなんだよ。残念だけどね」

男は肩をすくめた。

「この町のみんな、ちゃんと一度は説明を受けているはずなんだけどね。この山だけはなにがあっても安全だって。君たちのお母さんくらいの世代から、学校行事でかならずここに来ることになってるから、道がわからないなんていうのはいいっこなし」

「戦車が山に行く道をふさいでいた。よくもそんなこと」

「私は知らない。軍にいつてくれ」

慣れた様子で交わされる会話　どうも顔見知りらしい萱森と施設の管理人だという男の台詞は、事態のなにもかもを把握しているふうで気にかかった。成長するにつれて交流の少なくなった男子のうちのひとりである萱森と、それでもこの場でいちばん親しいのは私だ。「萱森」とよびかけると、彼はこちらをふりむいた。男は「お茶をいれてくる」と言つて、キッチンや風呂場がある方向へ去っていく。

もう何年も、まともに顔を見たことのない同級生は、手のひらで

顔をこすりながら私を見下ろし、「ひとのことは言えないけど、すごいかったな」とつぶやいた。「水路に落ちた」というと、「そう」と疲れた顔でため息をつく。彼と一緒に遊んだのはずいぶん前、小学生だったときが最後だ。中学校にはいったあたりから、彼は不真面目な連中、あまり勉強熱心でない先輩たちとつきあうようになり、家は近所なのに急激に疎遠になった。

「おかあさんは」

年月をうめるため、彼のたったひとりの肉親について、私は急いで尋ねた。

萱森の両親が、なみなみならない経緯をへて離婚した事实は、この町の暗黙の、そして共通の知識としてあった。国会議員までつとめた地元の名士であるおじいさんが亡くなってからというもの、母親と二人、助け合って暮らすつましさは、中学にはいるまでの彼がとびぬけて利発で素直な少年だったからこそ評判で、変化も仕方のないこととして受け入れられてきたのだ。いつも押し黙って、口を開けば世の中を揶揄してばかり、仲間以外にはめったに笑顔を見せなくなった萱森は、私の質問にだまって首をふった。

「そう」

「見てきたけど、うちも含め、あの辺は全部燃えた」

「帰ったの、どうやって」

「買出しで近くにいた」

あの辺、というのに私の家も含まれていると知って落胆した私を慰めるように、萱森は、私の頭に手を置いた。どうやってここに、と小声でたずねると「下水道」と呟いた。

「そう　それで、ねえ、あの人のことは」

「じいちゃんが議員だったとき、たまにうちに来てた。いつかはわからないけど、この町が攻撃されることはずっと前から決まっていたんだ」

実験戦場、と小声で言って、萱森は、キッチンから投げられたタオルを取る。実験戦場。ひとつひとつに漢字を当てはめると、たし



かにこの状況に説明がついたような気がした。

「お茶は紅茶がいいかい、コーヒーもあるけど」

「緑茶」

「それは、ちょっと時間がかかるよ。お菓子でも食べてて」

萱森はモニターに近づく。涙がこぼれないよう、必死で目を見開いてこぶしを握り締めるさまは、昔の彼にもどったようだった。画面のなかでこげた廃墟と化した町は、生物の気配がまるで感じられない。なにかを探すように、彼の視線はモニターの上をさまよう

まず、海岸の様子に、彼は息をのんだ。堤防に追い詰められて一斉射撃でやられたたくさんの町の人の死体。沖に巨大な船 戦艦 というものなのだろう、それが何隻も浮かんでいる。夕闇の中で、影が巨大な壁のようだ。

想像よりずっとひどかったのだろう、呼吸を忘れたように、ごくりとつばをのむ音。やがて、その左斜め上の、見慣れた校舎の映像を見つけて彼は硬直した。中学校の 正面玄関の前に、制服やスーツ姿の死体が山積みになっている。凝視したあと、ふいにはっとした彼はデスクに両腕をつっぱって、くずれおちるのを防ぐようにしてうなだれた。

「三沢に一緒に行こうって言ったんだ。近くにいるやつだけでも一緒に逃げれば助かると思って。でも、中学に妹がいるからって別れて、だめだとも言えなかった」

ぼそぼそと告げた内容は、言い訳のようでもあり、懺悔のようでもあった。言われてよく見ると、中学校の死体のなかにひとりだけ高校の制服の、スラックスの大きな足がのぞいている。男子のくるぶし 三沢が彼のいちばんの親友で、今朝も元気にふざけあっているのを見ていたから、私まで、がまんしていた涙がこぼれた。

「生きていても見つけだされてみんな殺される。逃げ道を用意するなんて仮の話で、ここに俺たちがいるのだったあのラッキーで、ほんとうは誰も生かす気なんてなかったんだ」

それを聞いたおばさんが、また泣きじゃくりはじめる。男の子も、

おかあさん、と声をあげて床に顔を伏せる。考えないようにしていたけれど、私ももう二度と家族に会えないということをお願い知らされて全身の力が抜けた。萱森が、肩を抱いて支えてくれなかったら、とても立っていられなかっただろう。

「おまたせ」

手にマグカップを持って、男がもどってきた。部外者だからか、ひとりだけとても陽気だ。彼は、私たちをみておやおやというように笑う。

「邪魔したかな。同級生が二人とは、なかなかすごい確率だからね」  
むっとして顔をあげた私をじっとみつめた萱森はなにかを言いたそうだった。私は、反論するために萱森が男をふりむいたのだと思った。だが、どこに持っていたのか、彼が取り出した銃がすさまじい音をたてて男にむかって発砲された。胸のまんなかを打ち抜いた銃と、男が持っていた緑茶のカップが床に落ちるのは同時に、両方とも陸にあがった魚のように、無力に床に転がった。

反動で彼の背を抱えるように後ろに倒れた私は、あぜんとして、萱森の顔をのぞきこむ。彼は何も言うことなくゆっくり起き上がり、まっすぐに立った。そのまま銃をひろう。目を見開いたまま、ぬれた床の上で動かない男にむかって、さらに、迷う様子もなく頭へと残りの銃弾を打ち込んだ。

耳がじんとするような銃声が消えると、萱森は武器を捨てた。私をひっぱって起き上がらせると、全身に怒りをみなぎらせて、うしろでびっくりしている三人に言った。

「いまなら、仇をとれる。生きているひとはもうここへこられない。つかまって殺されるか、先輩みたいにひどいめにあったあとに殺される」

高校の校庭で焼けて死んだ遺体の山に、もうひとつ死体が投げ込まれたところだった。先輩だ　全裸で、手足がすべて変な方向に曲がっていた。勤労青年が、萱森の言葉に、震える声で尋ねた。

「どうやって。どうすれば」

「この町は、このあと調査されて、存在自体がなかったことにされる。町の地下に爆弾が埋まつてるんだ。それが爆発すれば、町は何もないただの穴になる。爆弾のスイッチはたぶんこれ」

萱森は、デスクのいちばんはしっこにあった、プラスチックケースに覆われた赤いボタンを指差した。勤労青年は立ち上がり、萱森の隣に並ぶ。淡々とした説明を、私とほかの三人は黙って聞いた。

「全部すんだら、国のえらいやつらがここにきてこのボタンを押す。十年前、じいちゃんと話していたこいつがたしかにそう言った。今押せば、みんなを殺したやつを町ごと殺せる」

「でも、そうしたら、ここも崩れてしまうんじゃないか」

勤労青年が、ぐるりと部屋を見渡した。地下三階だてのうち、地下一階にこの部屋はあった。男の言葉では、さらに下へ降りる階段が隣の部屋にあって、炭鉱の坑道につながっているはずだ。

萱森は首を振った。

「この施設は、俺たちの町の監視場所で、炭鉱の跡地なんかじゃない。坑道っていうのもうそ、おえらがたや管理人用の抜け穴になつてるんだ。そこから脱出できると思う」

逃げてもけつきよくつかまって罪に問われ、殺されるのではないか、という質問を誰もしなかった。おばさんも小学生も立ち上がり、無言で私たちによりそった。心はひとつだった。

遠くに光が見える。数時間線路の脇で肩をならべて眠ったあと歩きはじめてもうだいぶたつ。勤労青年が持ちだした置時計のバックライトが、変わった日付と夜明けをしめしていた。

「あのまま町と一緒に死んだほうがよかったかもな」

いつものふざけるような口調で呟いた萱森に、だれひとり返事を

するものはなかった。私は棒のようになった足を交互に動かしながら、ぼんやりする頭で、さつきみた短い夢を思いだす。

私たちの自慢の町　ごみひとつない街角、ないものはない種類の施設、きれいに整備された道をずっと歩いた先に、私はいつもの海を見るのだ。白い砂浜に青くきらめく波濤、聞こえてくる子どもたちのはしゃぐ声。真昼の光をいっぱいにあびて、そこはまるで樂園、終わりのない平和の檻だった。

いつものようにソテツの木陰に座って足を投げ出していると、私の目の前を親しいひとたちが楽しそうに通り過ぎていく。

「まあやー、泳ごうよ」

水着にパーカーを羽織った弟がやってきて陽気に誘う。日傘をさしながらのんびり浜辺を歩いていたママと、お供よろしくお弁当のバスケットを持ったパパも、にこにこしながらやってきた。

「少しいいなら　うん、いいよ。一緒にいこうか」

現実ではないと知りながらも強く、せめて今はみんなと一緒にいることだけを願った私は、ごめんなさい、と呟いてひとつぶだけ涙をこぼした。

さあ　夢からさめるときがくる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4530w/>

---

戦場の管理者

2011年9月6日03時24分発行